

広告

企画・制作／  
読売新聞社広告局



佛教に基づく人格教育を実践する  
清風中学校・高等学校の平岡宏一校長と、  
環境問題に取り組む登山家の野口健さんが対談。  
若者の社会貢献について語り合いました。

## 清風学園 スペシャル対談 vol.3

# 人材とは社会貢献で生きる



平岡 宏一

清風中学校・高等学校校長

1961年大阪市生まれ。早稲田大学第一文学部卒。高野山大学大学院博士課程単位取得(密教学専攻)。2年間、インドに修学してチベット仏教を学んだ。清風中学校・高等学校で社会科教諭、副校长を経て、2011年から現職。チベット仏教に関する著書多数。

社会貢献というと仰々しく感じますが

それが純粋に面白いと思います。  
人の役に立つために、何が必要か

野口 私の場合、環境問題から入ったのではなくて、きっかけは単純なものでした。初めてエベレストに登った時にゴミが多くて、その一部は日本隊が残したものだった。周囲から「お前ら日本人は」と非難されて、悔しかった。「だったら、捨えばいいのだろう」と思ったのです。環境のためにという思いは、当時はなかった。富士山の清掃登

山も最初の4年間くらいは、年間参加者は100人程度でした。せっかく拾っても一週間すると、また「ゴミの山」活動をしながら、「もう嫌だな」「やめたいな」と思っていました。

平岡 環境問題は実は人間の問題なのだと感じます。人間が作ってしまった問題を、野口さんはその取り組みの中で、変えようとしておられる。そのお気持ちが大切ですね。仏教ではすべての存在は無数の「因縁」によって成り立つと見ますが、その性質は「空」であり、特定の本性を持たないと考えます。悪いことも特定の本性を持たず、悪い因縁が集まっただけ。逆により因縁を集めると状況は変わる。現代の問題に若者がきちんと取り組めば、変わるのはないでしょうか。

野口 確かに富士山のゴミ問題も大きく改善されました。今、5合目から上では本当にゴミがなくなりました。あちこちに流れ「白い川」と呼ばれていたトイレットペーパーも、今はなくなりました。国の補助金なども利用して、山のトイレが環境配慮型のバイオ式に変わった成果です。人を巻き込んで取り組むと、確かに変わるのでありますね。

平岡 高い目標を持って、それを達成するには様々な努力が必要ですね。そのため逆算して、どんな人間関係を築けばよいのかを考えることでしょう。冒険家の植村直己さんが亡くなる少し前に講演を聴きましたが、植村さんは「いかに人間関係が大切か」という話をされていました。

野口 粗り強さも大切ですね。「夢は」とよく質問を受けますが、「今の活動を続けること」と答えています。新しいことをするより、現にやっていることを続けるほうが大変なのです。一瞬を生きることで、最後まで生き生きと生きることで、最近になってよく考えます。

今の若者にエールを

野口 私が主宰している「環境学校」では毎日、参加している子どもたちにスピーチをさせる。最初は印象に残らないが、4、5日するとスピーチの中に「私はこうしたい」と自分の思いが入ってきて、すばく印象に残る。自分の言葉で話せる人間になつてもらいたいですね。



野口 健

登山家

1973年米ボストン生まれ。植村直己氏の著書に感銘を受けて高校時代に登山を始め。亜細亜大学時代の99年に3度目の挑戦でエベレスト登頂に成功。当時の世界7大陸最高峰登頂の最年少記録を25歳で樹立。エベレストや富士山での清掃登山や、「野口健環境学校」を主宰、人材育成にも取り組んでいる。